

むさしのインフォメーションサービス

今までにわかったことわからないこと

1 去年から今年へ

去年の六月から十二月まで、武蔵野青年の家に、講座「情報整理の技術」を開いてきました。

第一回から三回までは、日野市政図書館、特別区協議会資料室、中央図書館東京支店を見学しました。

第四回から六回までは、情報整理の実習をしました。

最終回は、「青年のための情報サービスシステム」というテーマで、てい談をいたしました。

計七回の講座の中で、私たちは、次の二つの事象性を感じました。

- (1) さまざまな分野の人から断片的に学ぶこと
- (2) 情報提供の意義と課題
- (3) 情報整理の方法と工夫

（つづいては「しいのみ」既刊号を御覧ください。）

そこで、今年度は、連続的な「情報講座」を開き、去年の成果をさらに発展させることにも、実際に「インフォメーションサービス」をやってみようという。

どんなになりました。

もちろん、青年の家に、そのための立派な施設・設備があるわけではありませんが、そればかりか、情報・資料のたいした蓄積ともありません。

しかし、図書館でさえ、「日本には、古くから図書館は建物でできてからという考えはありますが、図書館で書庫が機能は、資料提供を科なうサービスシステムであり、極論すれば、リヤカーでひっぱっても図書館は成立するのです。」と日野市図書館長の砂川雄一氏は述べています。（「しいのみ」二十号）

とりあえず、スタートしてみよう、そんな感じで、四月から、意欲的に、そして、「インフォメーションサービス」と銘づけて開始しました。（このとき、そういふわけは、謙虚な情報提供は、すでにこの社会教育施設でも行なわれていると思いましたが）

さて、社会教育施設に対する、一般の人の、マイナスのイメージとしては「何か」、「教育」されるより「や」ということがあるのではないだろうか。

空想な例ですが、ある人がライホームを賃貸時、一つの物件しか見せてくれず、に、それをしていく動機も不動産屋を呼んでみようか。それよりも、たぐさんの物件を見せてくれて、お勤めの物件について、また点まで含めて教えてくれる所を情報としてしよう。

社会教育においても、情報と愛されるといふ情報提供を追求してゆくことが大切だと思えます。

2 情報の範囲はどこまで？

青年の家の情報提供について、都立ハ王子図書館の島田若菜館長は、「施設独自の判断により、範囲を限定し、収集する量の見直しをなす。必要を説き、個人を基本にしつつも、それがグループ化し、活動するための情報」、「人間どうしの接触から得られるナマの情報、および今日の資料」に重点を置くことを勧めました。（「しいのみ」二十号）

又、同じ場で特別区協議会の大由史身氏は「美しみがら生える、考えながら生える、等、生きていくうえでの喜怒哀楽の全面的ものがほしいですね。」と述べています。（同右）

いづれにせよ、次に述べる「図書館の役割」との違いにも関わる重要な問題だと思えます。

3 図書館とはどこが違う？

青年の家の情報提供が、「ナマ」の、「今日の」な情報に重きを置くことすれば、確かに図書館の役割とは違いが出てくると思えます。

しかし、江東図書館のヤングアダルトコーナー担当の半田雄二氏は、「どこか図書館という名前からして、図書館じゃないというのが従来の図書館のイメージ。現代の若者に親しまれるには、図書館もなると述べています。『金銭しいのみで報告』と述べています。『やがてオーバーラップはさけられないわけですが、逆に、「資料を二カ所ものために、ネットワーキングにより、どこでも使えるようにする。』という図書館の考え方に習い、システムとして他と連携してやってゆく」（前掲、島田啓也）上うな情報に、必要なのではないでしょうか。

不確かなことばかり並べたてたようですが、みなさんの御助言もいただきながら、これから少しずつ確かなものを見つけてゆきたいと思っております。（社会教育主事補 西村美東士）